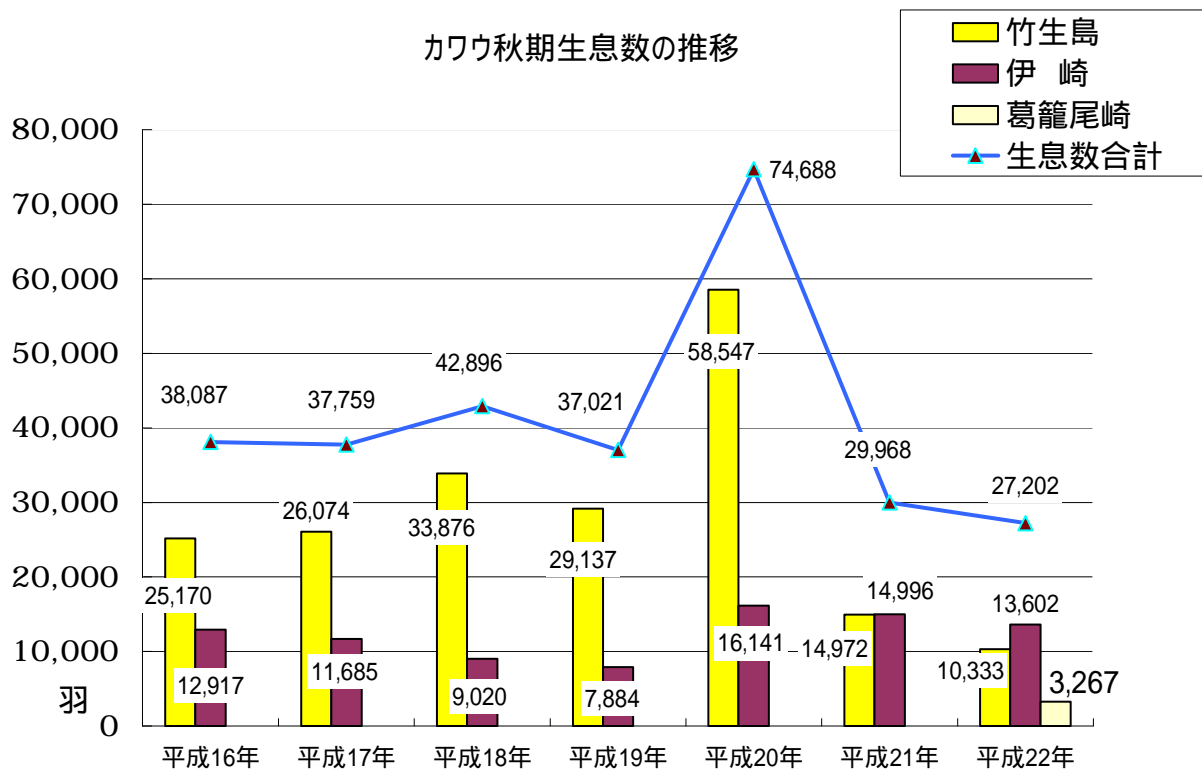
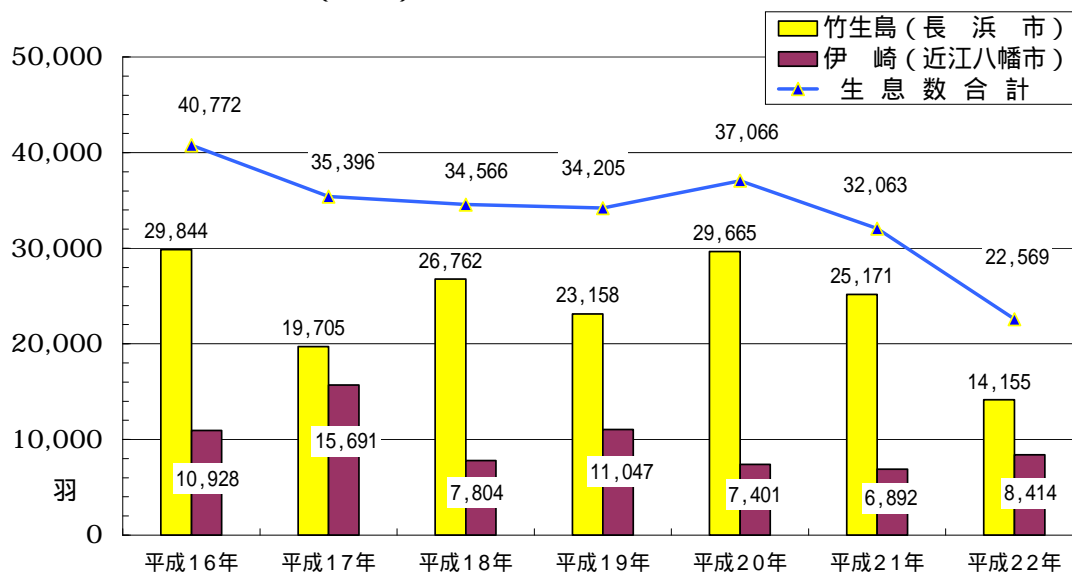


(1) カワウの生息数推移

滋賀県におけるカワウの秋期生息数について、平成16年から平成19年にかけて約4万羽程度で推移していたが、平成20年には約7万5千羽と前年に比べ倍増したが、平成21年には、29,968羽と平成16年以降初めて3万羽を割り込み、平成22年は27,202羽と続けて減少した。



(参考) カワウ春期生息数の推移



竹生島の状況

平成21年の14,972羽に対し、平成22年は10,333羽と約5,000羽減少した。なお、平成21年に続き、2万羽を割るなど、顕著な減少を示している。

また、春期と秋期の生息数について、平成 17 年以降は春期に比べ秋期は増加していたが（平成 20 年には倍増）平成 21 年と平成 22 年は減少した（平成 22 年は 3,822 羽の減）。

伊崎半島の状況

平成 21 年の 14,996 羽に対し、平成 22 年は 13,602 羽と微減であった。

春期と秋期の生息数について、平成 19 年までは増減はあったものの大きな変化はなかった。しかし、平成 20 年と平成 21 年は秋期生息数が春期生息数の約 2.2 倍と倍増したのに比べ、平成 22 年においては約 1.6 倍と増加率は減少した。

葛籠尾崎の状況

平成 22 年の 5 月にコロニーが確認され、秋期の生息数は 3,267 羽であった。

6 月の生息数は約 5,000 羽程度と推定されていた。

(2) 小コロニー・ねぐらの生息状況

コロニー（集団営巣地）とは、多数のカワウが集まって巣を造り繁殖する場所のことである。また、ねぐらは多数の個体が集まって夜間の休息・睡眠をとる場所である。

平成 21 年春期には、以前より存在したと思われる瀬田川（外畑）にコロニーが確認された。また、夏期・秋期には近傍地の瀬田川（大石）でねぐらを形成しているなどの個体移動はあったが、小コロニーの総個体数は平成 21 年秋期の 62 羽に比べ、平成 22 年は 152 羽と増加している。

ねぐらについて、平成 21 年より年 4 回のねぐら調査を実施しており、秋期に入り瀬田川の他に、赤野井湾で 5 羽と平湖で 23 羽のねぐら入りしている個体が確認された。

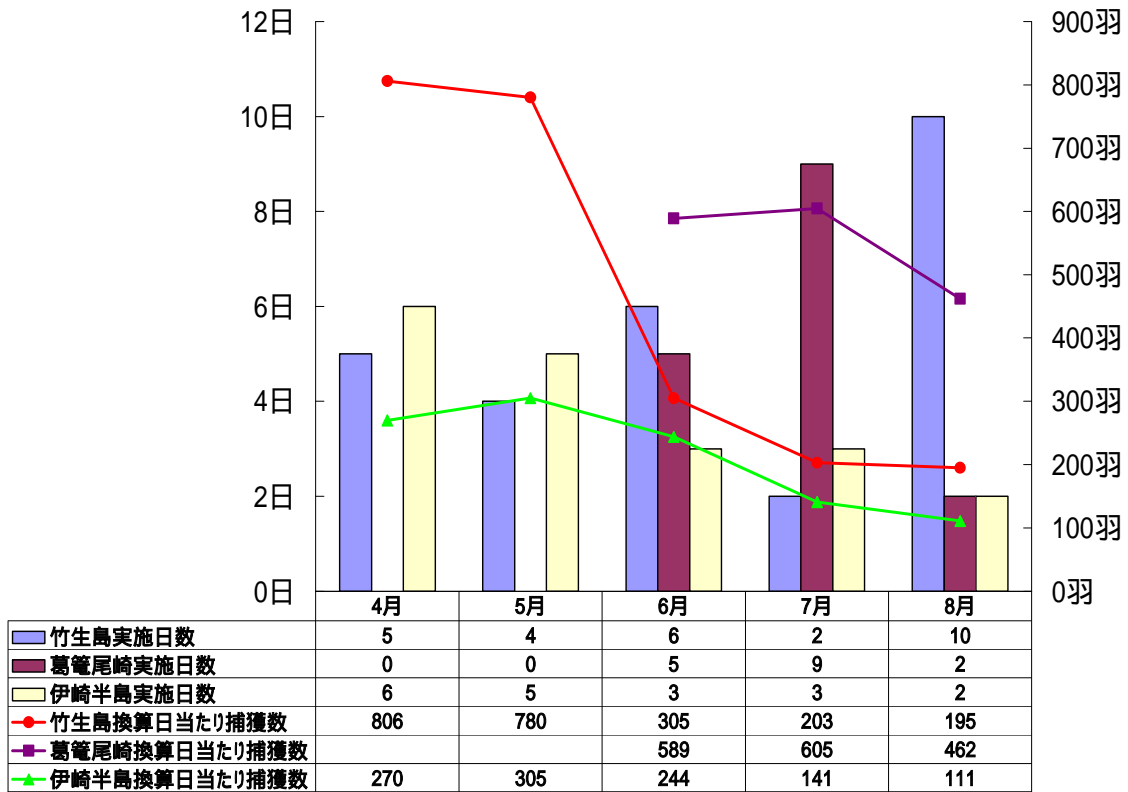
小コロニー・ねぐらにおける個体数推移

	小コロニー			ねぐら						
	西川池	大正池	瀬田川 (外畑)	姉川中流	赤野井湾	上鈎池	平湖	上丸尾池	神領新池	瀬田川 (大石)
平成17年春期				27						
平成18年春期				11						
平成19年春期	105	599		15	6					
平成20年春期	471	262		3						
平成21年春期	148	158	171	---	3	0	0	0	0	
平成22年春期	273	146		0	0	0	0	1	0	93
平成21年夏期	58	167	0	0	0					0
平成22年夏期	390	112		0	0	0		0	0	98
平成17年秋期				54						
平成18年秋期	64	69		46						
平成19年秋期	45	327		391	0					
平成20年秋期	214	45		34						
平成21年秋期	32	30		1	3	0	14	0	0	
平成22年秋期	49	103		1	5	0	23	0	0	28
平成21年冬期	0	46	0	0	229	0	2	0	0	0

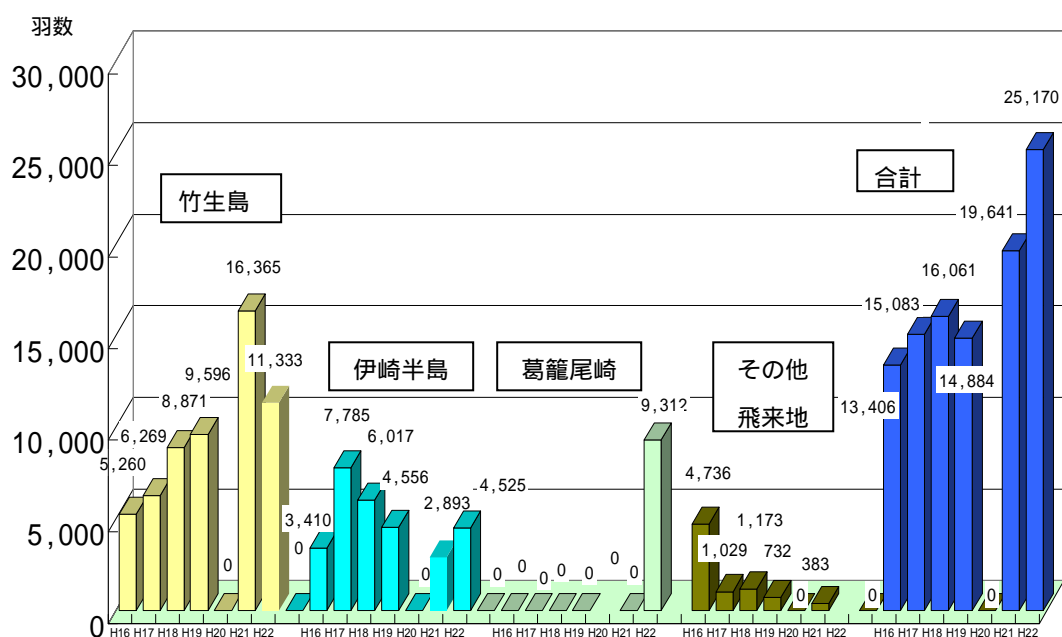
2. カワウの捕獲結果について

平成 22 年の捕獲数および捕獲実施日数

場所	捕獲総数	内訳		捕獲実施日数
		成鳥	幼鳥	
竹生島	11,333	10,623	710	27
葛籠尾崎	9,312	5,929	3,383	16
伊崎半島	4,525	3,403	1,122	19
計	25,170	19,955	5,215	62



月別捕獲日数および捕獲効率



滋賀県におけるカワウ捕獲実績

(1) 概況

平成 22 年のカワウ捕獲数は 25,170 羽であり、成鳥も 19,955 羽といずれも過去最高となった。秋期のカワウ生息数が前年に引き続き減少したことは、この大規模な捕獲の効果と思われる。

(2) 竹生島・葛籠尾崎の状況

営巣初期から中期にかけての捕獲はカワウが巣に執着を示すため、発砲音の小さなエアライフルを用いカワウの飛散を抑えながら効率的に実施し、営巣後期には巣に執着を示す個体の割合が減少してくるため、飛翔個体の捕獲に適した散弾銃を用いて実施した。また、新たにコロニーが形成された葛籠尾崎においても 6 月からエアライフルによる捕獲を実施した。

(捕獲結果の評価)

竹生島においては、4～5 月にかけて高い捕獲効率を達成し、両月とも約 800 羽/日と非常に捕獲効率が高かった。また、この時期に、巣内の成鳥など繁殖個体を選択的に捕獲したことによって、繁殖を効果的に抑制できた。捕獲効率の落ちた 6 月からは葛籠尾崎でも捕獲を行い、6～7 月で約 500 羽/日と高い捕獲率を達成した。両コロニーの捕獲効率を考慮しながら巣への執着を高めるために一定期間をあけるなど効果的な捕獲を実施したことが、竹生島での秋期生息数の顕著な低減や葛籠尾崎のコロニーの拡大防止に貢献したと考えられる。

(3) 伊崎半島の状況

伊崎半島においては、飛翔個体を対象にその捕獲に適した散弾銃による捕獲を実施した。

(捕獲結果の評価)

平成 21 年よりも実施日数を増やすなど銃器捕獲を強化したことにより、昨年を上回り 4,500 羽を捕獲したが、秋期の生息数は春期から大きく増加した。この原因として繁殖抑制が十分でなか

ったこと（成鳥の捕獲が不十分）や、竹生島や県外などからの飛来が考えられる。

（４）小コロニー・ねぐらの状況

強い捕獲圧が、コロニーを攪乱することとなり、結果としてコロニーの拡散を招く懸念がある。このため、カワウの分散状況を把握するため、平成 21 年からは過去にねぐら情報があった新規の箇所も追加して、年 4 回、春期、夏期、秋期、冬期にモニタリング調査を行っている。

現在までの結果では、平成 20 年から平成 22 年の生息数はコロニーによって増減はあるものの、顕著に増加してはならず、小コロニーの拡大は起こっていない。しかし、平成 21 年度に竹生島で営巣後期に散弾銃による捕獲を行ったことにより、一時期ねぐらを竹生島以外に移した個体が確認され、それが葛籠尾崎のコロニーを形成する一因になった可能性もある。

今後も、新たなコロニーやねぐらの形成がないか情報収集を行い、必要に応じ早期の対策を講じることができる体制を構築していく。